

マーチング留学 “The Cadets”での体験

京都府立洛西高等学校

英語科教諭 山下 尚樹

(2007年3月英米語学科卒業)

私がアメリカにマーチング留学をしていたのは、2001年～2003年のそれぞれ春と夏をかけて、であった。高校時代からの夢を叶えるべく渡米し、憧れのチーム The Cadets でマーチングをした。それは自分にとって人生で最も大きなチャレンジであった。その生活の中で学んだことが、現在の私の行動に影響を与えている。アメリカでマーチングをするということは、英語が必須になる。この考えを高校3年次の担任に教わり、進学先を京都外国語大学に決め、英語を学ぶことにした。

高校卒業後、一般のマーチングチームに所属し、大学1回生の冬に、日本武道館で開催されたマーチングバンド全国大会に出場を果たした。大学生活との両立は大変であったが、自分の好きなことをしているのでそれほど苦労は感じなかった。全国大会の翌週にアメリカで行われたオーディションキャンプに参加し、見事に合格を得ることができた。今思えば、運が良かったのであろう。オーディション課題の準備をすることなく、キャンプに行ってからそこで練習し、オーディションを受けた。あまりの準備不足に少し反省している。英語でのコミュニケーションにおいては、大学1年間で学んだ英語力が助けてくれた。結果的についに「夢」を叶える切符を得た。ここからが、本当の夢への道となる。そう覚悟した。

アメリカでのマーチング活動は主に夏休みを利用して、青少年育成を目的として行われる。したがって14歳から21歳までしか入団できないという年齢制限がある。私は19歳から21歳までの3シーズンを参加した。中学校や高等学校の部活動のように、1年目は新入生、2年目は経験者、3年目は熟練者の扱いを受ける。チームの中には14歳から長年所属しているメンバーがおり、まさに神の領域という目で周囲から称賛を受ける。私は外国人としてアメリカ人の集団に溶け込むように努め、まさに Americanized という言葉がふさわしい状態であった。友達ができ、日々の練習を通して仲が深まり、そして信頼関係が構築される。ある日、友達の一に“You are really like an American, not just a foreigner.”と言われたときは嬉しかった。その際、“Are you kiddin’ me?”とすぐさま返事をしたら、“See?”と返ってきて、2人で笑った。良き思い出である。

マーチングという競技については日本でもだいぶ認知されてきたのでご想像いただけると思うが、アメリカでのマーチングは大きく違う。135人のメンバー、約40人のスタッフが衣食住を共にしながら3ヶ月を過ごすことになる。この大所帯の中、日本人は2、3人だけだった。マーチングを通してメンバー同士が互いを知るだけでなく、共通の目標に向けてチームとして活動する。マーチングだけをしていればよいというのではなく、集団生活もきちんとこなしていく必要がある。もちろん未熟な青少年の集団なので日々問題が発生し、それを乗り越えながら成長していく。この過程を楽しむことができるかどうか、満足できる3ヶ月を生むことができるかに大きく関わる。例えば、仲の良いメンバーもいればそうでないメンバーもいる。信頼できるスタッフもいれば、そうでないスタッフもいる。まさに社会の縮図がそこにあり、その中で生活していくことになる。私はもちろん外国人なので、消極的にならないように、また偏見や差別を受けたり、過小評価されないようにできるだけ多くの人とコミュニケーションをとり、自分を確立させることに努めた。

活動の中で、1日のスケジュールは過激である。練習日の朝は7時に起床、朝のランニングや朝食など

を済ませて、9時に練習開始、昼食、夕食をはさんで21時に練習終了、23時に消灯というハードなものだ。通称“Nine to nine.”と呼んでいた。本番日はまたさらにハードである。夕方までの練習を終えるとシャワーや荷造りをし、ショーのあるスタジアムに移動する。だいたい20時~21時に本番があり、閉会式など終了後バスに乗り、夜をかけて次の州へバスで移動する。野球メジャーリーグのマーチング版という例えがわかりやすいのかもしれない。体の休まる日はない。3ヶ月間でオフはたったの3日だ。今思えば、よくやりきったものである。

この3ヶ月でアメリカ全土とまではいかないものの、約30州をバスでツアーすることになる。しかし全く観光ではない。各州で行く場所は練習で使用する施設(学校が多い)と本番の会場であるアメフトのスタジアムである。最終日は毎年8月10日前後で、決勝戦にはトップ12団体が進むことができる。私が参加していた3年間は、残念ながら優勝することはできなかったが、01年は2位、02年は3位、03年は2位の成績となった。決勝戦にはスタジアムに約2万人の観客が訪れる。そこでの観客の熱狂ぶりは凄まじい。私のチームの演奏演技後にはスタンディングオベーションがあり、その歓声が忘れられない。映像で見るのと実際の場面で見るのは全然違う。圧倒的であり、感動的である。やはり音楽はライブが良い。

The Cadetsでの生活は楽しみや苦勞も多くの喜怒哀楽があった。自分の人生の中でこれほど充実した時間を過ごしたことはなかったので、今でも大事にしたい記憶となった。今の自分がいるのも、この経験のおかげである。アメリカ人たちとのコミュニケーションは難しかったが、『郷に入らば、郷に従え』の精神で、何とか乗り越えることができた。アメリカ国歌を全体の前で歌い、人気を取ろうとしたこともよく覚えている。とにかく自分の立場を明確にし、埋もれないように生きていたように思う。

最後に読者の皆様に紹介したいことは、このチームに入って私が学んだ生きる知恵である。それは以下の4つである。1つ目は『態度を選ぶこと』:物事は自分の考え次第で何とでもなる。2つ目は『その場にいること』:現場にいないとわからないことが多くある。3つ目は『遊びがあること』:真面目すぎず、冗談を言える余裕を持つ。最後に『人を幸せにすること』:自分のためではなく人のために何ができるかを考える。この4つのアイディアはいつも私の中の判断・行動基準になっている。

この読者の皆様は教会会の会員だと聞いている。教師の道が険しいということは十分共感を得ることができると思う。また、昨年から続いているコロナ禍の影響は大きく、日常の教育活動は変化を余儀なくされている。その中でも目標を達成すると必ず自分の力になると私は信じている。僭越ながら読者の皆様には、自分の夢や目標を諦めることなく、何としても叶えることを目指してほしいと思う。「できない理由ではなく、できる方法を語れ。」という台詞が私を幾度となく救ってくれた。苦しいことや辛いことがあって当然で、粘り強く乗り越えてこそ、本当の力になると信じている。

ここまで紹介してきたようなある意味では珍しい体験は、珍しいから意味があるのではなく、その体験の中で変化を恐れず大きく成長を遂げたから意味があるのである。だからこそ、今の日常にありふれた誰もがするような体験を大事にしていくことが教育の鍵になるであろう。学校で目にする生徒たちは毎日、何かしらの成長を遂げようとしている。生徒たちが心から何かを求める力はコロナ禍でも大きく減っていないように私は感じている。生徒たちの好奇心を探り出し、様々な問題を解決していくきっかけを与えることが教師の使命ではないかと考える。

末筆にあたり、この寄稿の依頼をくださった左近会長ならびに関係者の皆様に厚く感謝申し上げ、結びとさせていただきます。

